

古墳時代の「玉」の謎

宮崎県をはじめ、古代歴史文化にゆかりの深い14県（宮崎県以外では、埼玉県、石川県、福井県、三重県、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、福岡県、佐賀県）が連携して、平成26年度に古代歴史文化協議会（※1）を立ち上げ、古墳時代の人々にとって大変貴重であった「玉」がどのようにつくられ、マツリの場合どのように使われたのか、また「玉」をめぐる地域間の交流とは・・・等々、古代の政治や祭祀を解明する上で重要な「古墳時代の玉類」をテーマに共同調査研究を進めています。今回は、その過程で見えてきた、宮崎の古墳時代の玉類をめぐる謎について2件ご紹介。



銭亀塚（宮崎県串間市）出土の雁木玉

雁木玉の履歴とは？

雁木玉（がんだま）は、2色以上のガラスを巻きつけて“斜めでギザギザ”（＝雁木）等の縞模様が作り出された玉のことです。宮崎県内では、1953（昭和28）年に発掘調査された銭亀塚（ぜにがめづか・串間市・6世紀）から、頭か首周りを飾っていたのであろうガラス小玉35点・耳飾り1点とともに雁木玉1点が発見されました。

この雁木玉、高度な技術を要する美しいガラス玉ですが、日本全体でも20点未満、韓国の三国時代ものを合わせても全体で30点ほどしかない稀少品であり、その生産地は地中海沿岸や黒海周辺であったとわかっています。西アジアで作られた雁木玉が遠く韓国や日本までもたらされたわけですが、どういったルートで誰が何のために運んだのか、そして串間市の古墳時代の首長がどうやって手に入れたのか等々、多くの謎が残っています。



蓮ヶ池46号横穴墓（宮崎市）出土の玉

青い石は韓国産？

蓮ヶ池46号横穴墓（はすがいけ・宮崎市・7世紀）からは、たくさんの須恵器等とともに、瑪瑙製勾玉1点と青い石製の丸玉が出土しました。この青い石は類例があまりなく、消去法でいけばヒスイに最も似ている・・・と言われてきました。ところが、協議会で検討を進めた結果、蓮ヶ池46号横穴墓出土の青い石はヒスイではなく、韓国南部に産地がある天河石（てんがせき）の可能性が高いと判明したのです。

天河石（アマゾナイトともいう）製の玉は、日本では縄文時代の終わりから弥生時代の初め頃の北部九州等で流通していたと判明していましたが、古墳時代に使われたという事例は認識されてなかったため、たいへん驚かされました。福岡県や奈良県でも古墳時代後期以降の天河石製丸玉等が出土しており、古墳時代に天河石製の玉が使われたことはどうやら確実のようです。そうなると問題は、この天河石製の玉の由来です。縄文時代のものが長く保管あるいはどこかで再発見されて古墳時代の玉として使われた、あるいは、縄文時代のものとは無関係に、古墳時代後期以降にあらためて天河石を玉に使用したのか・・・。韓国の状況も含め、天河石製玉類の正体をめぐる謎解きはこれからとなります。

※1 古代歴史文化協議会ホームページ <http://kodairekibunkyo.jp/>